

「お言葉どおり、この身になりますように」

(ルカによる福音書 1:26-38)

神によって天使ガブリエルがマリアのところへ遣わされます。そこで告げられたのは信じ難い出来事でした。当時、婚約が成立すれば法的な関係が生まれました。マリアはすでにヨセフの「いいなずけ」でした。つまりマリアが今、ヨセフ以外の子を宿したとなれば、法に則り石打ちの刑で殺されてしまうということです。当時、通常は13歳位で婚約をし、約一年後には結婚生活に入ったと言われていました。ですから、マリアはまだこの試練を受けるにはあまりにも幼いのです。神の選び、召命とは何と不条理で、厳しいことでしょうか。旧約聖書の偉大な預言者たちですら、その召命を拒み、逃げ回ります。まだ幼きマリアが、それを受け入れるなど、どれほどの困難だったことでしょうか。けれども、主イエスがこの世に来られ、主イエスによって神の救いが実現するためには、マリアが必要だったのです。神によってもたらされる救いとは、「主はみ腕の力を振るい、思い上がるものを打ち散らし、権力を振るう者をその座から下ろし、身分の低い人を引き上げ、飢えた人を良いもので満たし、富んでいる人をむなしく追い返される」と、マリアが後に高らかに歌い上げる通りのものです。その救いの実現のために、マリアこそが選ばれたのです。王様でも金持ちでも、強い立場にあった男性でもない。ただの取るに足らないひとりの幼き娘によってこそ、神はこの世界のすべての人への救いを実現されるのです。

そしてこのマリアだからこそ、到底信じ難い天使ガブリエルの言葉を信じることができました。権力や地位を握る者はそれを手放すことはできません。目の前の利益に目がくらみ、本当の幸いを見失っている人間には天使の声など響かないのです。もちろん、マリアにとっても、これからのヨセフとの楽しみだった未来が突然絶たれ、それどころか命までも失う危険のある決断です。けれども、天使の言葉に戸惑い、考え込んでしまったマリアでしたが、ついには「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」と応諾しました。彼女は自らのささやかな未来への希望を手放し、神からの大きな希望に身を委ねたのです。なぜなら、彼女は神の救いの約束の実現を信じたからです。マリアは約束を聞いて、信じたのです。自分が身ごもることになる赤子を通して、主なる神の憐れみがすべての人を覆う日が来ることを信じ、希望したのです。

天使を通して語られた神の言葉が、マリアに喜びと希望をもたらしました。聖書において「はしため」とは、主人の道具というよりも、主人の憐れみを期待し、希望を得る者のことです。このマリアの信仰告白により、主イエス・キリストがこの世界に降ります。召命とは聖職に限らず、すべての人にあります。わたしたち一人ひとりがこの世界に不可欠な存在として神によって創られ、神からの役割が与えられています。わたしたち一人ひとりに神からの召しがあるのです。それぞれの役割は異なっても、目的は同じです。すべては、マリアと同じように御子イエスによってもたらされた救いをこの世に伝えるための召しです。一人ひとりがその召しに応じるところに、主イエスは来られるのです。マリアが自らを明け渡して主イエスを迎えたように、わたしたちも自らを開き、神からの召しをこの身に受けるとき、

クリスマスの喜びが自らの喜びとなります。まことの喜びと希望のうちに、降誕日へと進んでいきましょう。